

令和五年九月度御講

四条金吾殿御返事

(御書一二九二六〇七行目〜一〇行目)

【本文】

李広將軍と申せしつはものは、虎に母を食らはれて虎に似たる石を射しかば、其の矢、羽ぶくらまでせめぬ。後に石と見ては立つ事なし。後には石虎將軍と申しき。貴辺も又かくのごとく、敵はねらふらめども法華經の御信心強盛なれば大難もかねて消え候か。是につけても能く能く御信心あるべし。

【通釈】

昔、中国の李広將軍と申すつわものは、虎に母を食い殺されて、その虎に似た石を射ると、その矢は羽根まで達する程突き刺さった。しかし、それが石と気付いてからは、幾度射つても矢が刺さることはなかった。このことから、後世の人々は李広將軍のことを石虎將軍と呼ぶようになった。あなたもまた、この故事と同様(に一念が大事)である。敵が狙っているであろうが、法華經への御信心が強盛であれば、大難も消えるであろう。これにつけても、よくよく御信心を深めていきなさい。

【主な語句の解説】

李広：中国の前漢時代、文帝・景帝・武帝に仕えた將軍。武勇に優れており、諸国から「飛將軍」と呼んで恐れられた。司馬遷による「桃李不言 下自成蹊」の成語でも知られる。

つはもの：武器・兵器、または軍人や武士のこと。

羽ぶくら：矢につけた羽根。矢ばね。

【背景と大意】

本抄は、弘安元(一二七八)年閏十月二十二日、日蓮大聖人御年五十七歳の時、身延から鎌倉の四条金吾に与えられたお手紙です。大聖人は、法華經の行者(御本仏)として衆生救済のため全力を尽くしてこられました。長年の御労苦により、建治三(一二七七)年頃から健康を損なわれる日々が続きました。このような中、金吾は御供養の品々や薬をお届けし、そして自ら身延を訪れた際には大聖人に懸命の治療を施しました。その結果、大聖人は体調を回復されたのです。

本抄では、金吾への謝意を述べられるとともに、身延からの帰路を心配されて、鎌倉から身延へ来る人ごとに金吾の安否を尋ねたことが記されています。

本日拝読の箇所は本抄の最後にあたり、李広將軍の故事を挙げて、さらに信心を深めるよう教示されています。

○李広將軍の故事にみる一念の大事

拜読の御文に「李広將軍と申せしつはもの」とあるのは、中国に実在した李広という將軍の話です。李広は、母親が虎に食い殺されたことから、その虎を成敗するために狩りに出ました。やがて草むらで虎を見つけたので矢を射ると、矢は深く突き刺さりました。しかし李広が喜び勇んで近づくと、それは虎の形をした岩でした。その後、それが岩と知った上で矢を放つても、再度岩に突き刺さることはありませんでした。初めに矢が刺さったのは、母の敵(かたき)という強い一念があつたからであり、このことをもつて大聖人は、一念の強さを示す故事として同抄に挙げられているのです。

大聖人は、本抄に「神の護ると申すも人の心つよきによるとみえて候」(御書一二九二)と仰せになり、神の守護と言つても、所詮はその人の一念の強さ、信心の固きに依るのであると教示されています。すなわち、李広將軍の堅固な一念によって、石に矢が刺さるという普通ではあり得ない事が起こったように、心が固ければ固いほど諸天の守りも強くなるとの仰せです。大聖人は金吾への激励を通して、私達が強い一念を持つて信心修行に励めば、御本尊の御加護も大きく顕れることを教えられているのです。

○折伏の信念を持つて

何事も決意したときの気持ちをお忘れず、行動に移し努力し続けることによって、はじめて目的は達成できるものです。

折伏の成否は、相手を救いたいという私達の断固たる一念に掛かっているとについても過言ではありません。私達は、地涌の菩薩の眷属としての尊い使命を決して忘れないようにしたいものです。

総本山第六十七世日頭上人は地涌の菩薩の使命について、「地涌の菩薩は、世の腐敗・墮落の泥水どろみずに染まらぬこと、蓮華の水に在るが如く、しかもその汚泥かたを離れず、大慈悲をもって志念力堅固に妙法を弘通することが経文の相であります。つまり、世間の迷いのなかの悪習・悪風に盲従せず、妙法受持を根本として折伏の信念を持つて濁悪の世を進むことこそ、地涌の使命であります」(大日蓮・平成十一年二月号)と指南されました。末法濁悪の世に生まれ、大聖人の弟子檀那となつた私達には、地涌の菩薩としての深い因縁が開かれるのです。「一念岩をも徹す」との堅固な心で実践していけば、必ず折伏はできます。一人ひとりが地涌の眷属たる自覚と確信を持つて、立正安國の実現へ向けて力の限り精進してまいりましょう。

○御法主人御指南

まさしく今日の、邪義邪宗の謗法の害毒によつて、どれほど多くの人々が不幸に陥り、苦悩に喘いでいることか。こうした現状を見る時に、私どもは妙法信受の功德を身をもつて示し、一人でも多くの人々を大聖人様の正法に帰依せしめるために、我々一人ひとりが破邪顕正の御遺訓のままに、断固たる勇氣と果敢なる行動をもつて折伏を行じていく、妙法広布に尽くしていくことが、今、最も肝要であることを知つて、講中一結・異体同心して、いよいよ一天広布を目指して精励されますよう、心からお祈り申し上げるものであります。

□まとめ

今月は、大聖人が発迹顕本された月です。私達は、一切衆生救済のために、末法に御本仏として出現された大聖人の深い意義とお振る舞いを拝し、その大慈大悲に報い奉るべく正法流布に邁進すべきです。

御法主人人猊下は折伏の意義について、「折伏は一切衆生救済の慈悲行であり、自らの過去遠々劫からの罪障を消滅して幸せになるための最高の仏道修行であり、そして仏祖三宝尊に対する最高の報恩行であり、また仏様から与えられた尊い使命であります」(大日蓮・平成十八年四月号)と指南されています。一人ひとりがこの御指南を心に留め、講中異体同心して勇猛果敢に仏道修行を展開してまいりましょう。